



わたしのハンガリー留学体験記③ ～日本との共通点について～

今回はハンガリーと日本の共通点について話したいと思います。

ハンガリーはヨーロッパにある人口約977万人の日本と比べると少し小さな国です。ハンガリーは親日家の方が多く、日本との共通点などもあります。その例としてまず、ハンガリーと日本では苗字・名前の順番が同じです。私はこのことをハンガリーで住民登録をするまで知りませんでした。そのため何度も間違えて英語の順番で名前を書いていました。意外なところで日本との共通点があり、ハンガリーと日本の繋がりが感じられて、少しうれしかったです。他にも、ハンガリーには温泉がたくさんあり、日本と同じく世界的な温泉大国として知られています。私はコロナの影響で行くことはできませんでしたが、ホームステイをしていたブダペストには100を超える源泉と50近くの浴場があるそうです。また家庭内でもシャワーだけではなく、よくお風呂に入っており、私もお風呂に入る度に日本の事を思い出すことができました。これら以外にも、多くの場面で日本を感じる機会がありました。そのため、私や他の日本人留学生にとって、ハンガリーはとても過ごしやすい国でした。 (3年5組 橋本美由紀)
*橋本さんは、夏休み中に母校の船引中学校を訪問し、後輩たちに自分の留学経験を伝えました。

SDGs達成に向けての取り組み～ 8月7日開催
猪苗代湖清掃と「ヒシの実」を用いた「天狗」作りを行いました



猪苗代湖の清掃活動と「ヒシの実」を用いた作品作りを行い、3年生10名が参加しました。まず、センターの方より、「ヒシの実」がもたらす猪苗代湖の水質汚染についてのお話を伺いました。ヒシなどの水生植物が枯死し腐食し、大腸菌を発生させることが水質汚濁の一因ですが、「ヒシの実」は以前よりも大きくなっており、また、そのトゲを地面にさして流されないようにしているため、水底にとどまってしまうのだそうです。とげのある外見と厄介なところがコロナウイルスに似ているなど思いました。工作では、「ヒシの実」の形を生かし「天狗」を作製しましたが、地元の磐梯神社で「天狗」がまつられていることに由来しています。

その後、天神浜に移動し清掃活動を行いました。例年、ボランティア団体が春から夏にかけて湖畔の清掃活動を行いますが、今年はコロナウイルスの影響で行われていません。そのため、昨年打ち上げられた「ヒシの実」が数多くそのままになっていました。短い時間ではありましたが、猪苗代湖のマイナスイオンを浴びながら作業を行いました。



「ヒシの実」で作った天狗

「ヒシの実」の果実はゆでて食べることができます。薬用効果もあり、乾燥させて粉にして、ひし餅などで食べられていました。水質低下を引き起こす、嫌われ者の「ヒシの実」ですが、猪苗代の伝説に基づいた「天狗」や「天神様」などの工作をとおして、水環境について学ぶことができます。郡山市の水源である猪苗代湖の水質を悪化させないためにも、機会があれば猪苗代湖清掃に参加してみましよう。

キリバス共和国に送る紙芝居を製作中

現在、福島県内で伝えられてきたお話の中から、『カッパと与四郎』と『天狗のうちわ』の2つを選び、キリバス共和国の皆さんに読んでもらうための紙芝居を製作中です。

キリバス共和国は、地球温暖化の影響で、現状のままだと2050年には国土の大半が沈んでしまうと言われていています。人々は移住してしまうため、国の文化が失われてしまう危機に瀕してしまいます。2011年に起きた福島第一原子力発電所の事故により、避難を余儀なくされた地区がありましたが、そこで行われてきた伝統芸能やコミュニティを維持していくことは大きな課題です。

私たちがキリバス共和国にできることは何か？と考えた時に、私たちが少なからず経験した出来事をもとに、自分たちの地域について知ってもらうとともに、その国や地域の文化を少しでも守ることができないかと考えました。今後、キリバス共和国に伝わるお話も紙芝居にしたり、キリバス共和国に送る「ヒシの実」の天狗作りのワークショップも開催したりする予定です。何かをしたいと考えている人は参加してください。



オイガ部と図書委員会が中心になって作成中。これから色を付けます。

プチ国際理解講座～タイのおもてなし文化を体験しました。7月22日開催

タイに3年間滞在されていた竹田有理さんをお迎えし、野菜のカービング体験を行いました。カービングは野菜や果物を、時間をかけて彫ることで、来客者を心待ちにしていたという「おもてなし」気持ちを表現している王宮文化です。

まず、全員起立し、タイの国歌を聞きました。タイには「王様を讃える国歌」とオリンピックなどで演奏される「一般の国歌」があり、今回は「王様を讃える国歌」を聞きました。次に、タイの画像と共にお話を伺いました。タイは性転換手術を受ける人たちが多くいますが、そういった人たちも仕事の面でも差別されることなく、「自分が自分らしく生きられる」ことを大切にしている国なのだと思います。その後、タイで流行しているポップソングを聞きながら、カービング体験を行いました。生徒たちは一言も喋らずに作業に熱中していました。



久しぶりに講座を開くことができ、国際科学科らしい時間を持つことができました。コロナの影響により当初予定していた行事が行えずにいますが、感染に配慮しながら、できることを少しずつ実現していきたいと思っています。